

せい しょ ぼう けん もの がたり 聖書の冒険物語

だい ごう
第14号
ねん がつ にち
2022年4月29日

ものがたり エステル物語

こども きだい しょう
子供のためのエステル記第1〜9章

だい ぶ 第1部 じょおう たんじょう 女王の誕生

いま やく ねん まえ
今から約2,500年ほど前、メド・
ペルシャの首都スサに、非常に美し
くて優しい娘がいた。彼女の名前は
ハダッサといった。

ハダッサは、幼いころに両親を亡く
していた。幸いなことに、ハダッサ
にはモルデカイという従兄弟がい
た。モルデカイはスサの宮廷で働く
役人で、給料も良かった。ハダッサの
両親が亡くなった時、モルデカイは
ハダッサを養女としてむかえ、「星」
という意味の「エステル」というペ
ルシャ語の名前を付けた。

モルデカイは、エルサレムに戻ら
ないでメド・ペルシャにとどまる決

しん おおぜい じん ひとり
心をした大勢のユダヤ人の一人だっ
た。クロス王がペルシャを治めて以
来、ユダヤ人は自分の故郷に帰るこ
とが許されていた。ゼルバベルを総
督とする45,000人ものユダヤ人達は
故郷に戻ることを選んだが、何十万
人ものユダヤ人はとどまることを選
んだ。クロス王はユダヤ人に対して
友好的で、彼らが望むように働いた
り神を拝むことを許したので、彼らに
とって、故郷に戻るよりは、とどま
るほうが楽だったのだ。¹ アハシュエ
ロス王が統治している間も、同様に
良好な関係が続いた。

モルデカイのように、宮廷内の良
い地位に就く者もいれば、国中で様
々な事業に携わる者達もいた。モル
デカイは宮廷務めの役人として、他
の家臣達と共に、宮廷の入り口近く

おう もん すわ くだ めいれい
の王の門に座り、王から下される命令
を待っていた。

ある晩モルデカイは、王妃ワシテが
追放され、宮廷内は騒然となってい
るという衝撃的な知らせを持って帰
宅した。前夜は、アハシュエロス王が
127州から招いた何百人もの貴族や
知事達のために開いた7日間の宴会の
最終日であった。出席者達は酒を
飲み、華々しい催しを楽しんでいた。
酒ですっかり酔いの回った王は、王
妃に冠をかぶって出て来るようにと
命じた。その美しさを、騒々しい客
達に見せなくなったのだ。ところが、
王妃ワシテはそれを拒んだ。

アハシュエロス王は、ワシテが命
令に背いたことを激怒した。それで、

すぐさま最も信頼している知者達に
相談し、ワシテは2度と王の前に出
ることは許されないという、変更不
可能な詔がすべての州で皆知らさ
れた。そして、王妃の位は他の者に
与えられることになった。

王が新しい王妃を求めることにな
ったと聞いて、ペルシャ中の人々は
興奮に包まれていた！ 各州で美人
コンテストが開かれ、その中から最
も美しい乙女達がスサの宮廷に集め
られて王の審査にかけられることにな
った。インドからエチオピアまで、
各州から次々と美しい若い娘達が
宮廷内の後宮（婦人部屋）に到着し
た。そこで娘達は、何か月もかけて、
特別な準備をし、美容術を受けるこ
とになっていた。

¹ その80年後、預言者エズラと共に、第2の大きな動きがあり、ネヘミヤの時には、エルサレムを
再建するという第3の大きな流れが起こった。

つぎつぎ　とうちやく　むすめたち　かんざつ
次々と到着する娘達を観察しながら、モルデカイは物思いにふけていた。（うちの若くてかわいらしいエステルは、他のだれよりも美しく、ふさわしいではないか。神は、エステルが王妃になるのを望んでおられるのに違いない。）

かんが
考えれば考えるほど、モルデカイは、アハシュエロス王の王宮でユダヤ人の王妃となるのがエステルの運命なのだと確信するのだった。その夜、モルデカイは帰宅すると、エステルを呼んで、この啓示について話した。最初、エステルは面白がっていたが、モルデカイが真剣にそう思っていると分かると、衝撃を受けた。

わたし
「私がですって？」と、エステルは笑って言った。「お父様、ユダヤ人である私を、王様が王妃に選ぶはずがないわ！」

それでも、モルデカイの確信はゆるがなかった。エステルはモルデカイと一緒に宮廷へ出向くことを承知した。

きゆうてい　つ
宮廷に着くと、モルデカイはエステルを、王が最も信頼している、後宮の責任者であるヘガイに紹介した。ヘガイはエステルの美しさに打たれ、エステルこそ、王妃として選ばれるに違いないと思った。それで、すぐさま7人の侍女を付け、後宮の最も良い部屋に案内した。

わか　ほうよう
別れの抱擁をすると、モルデカイはエステルにささやいて言った。「だれにも、自分の国籍や家柄を話してはいけないよ。王妃になる機会を台無しにしないためにね。」

なんしゅうかん
何週間もたつと、エステルはますます美しくなっていた。とは言え、王妃になることだけを夢見ている美しい女性が大勢いる中で、エステルが選ばれるには、奇跡を要するだろう。

モルデカイはというと、大切な養女についての知らせを、今か今かと気をもみながら待ちわびていた。王はきっと、エステルを選ぶに違いない。だが万が一、選ばれなかったら、どうなるのだろうか？　家へ帰して

もらえるのだろうか？　王にお目通りした女性の多くは、側室として選ばれている。名目上、王と結婚はしていながらも、王がお望みで名指しでよぶのでない限りは、王の前に出ることはないのだ。それは、王妃であっても同様だった。王妃は別邸で暮らし、王に呼ばれない限り、王の前に出ることはない。

わか　むすめたち　みな　おう　まえ　で
若い娘達には皆、王の前に出ることを許される前に、12か月間の清めの期間がある。長い待ち時間ではあるが、エステルはその間に、これから起こることへの心の準備をした。そして、遂にエステルが王に会う番になった時、ヘガイはエステルに、何を持って行きたいかとたずねた。王に会う前に、娘達は何でも、後宮から欲しい物をもらって行くことができたからだ。エステルは、何でも望む物をもらうことができたが、ヘガイの勧める物以外は何も求めなかった。

そと　こうきゅう　きゆうてい　おう　ざ　ま
外では、後宮から宮廷の玉座の間へ向かうエステルを一目見ようと、モルデカイが待ち受けていた。エス

つう　ろ　あらわ　かのじょ　み
テルが通路に現れると、彼女を見かけた人々はその美しさに圧倒された。エステルの前にも、大勢の若くて美しい娘達が通ったが、エステルには違いがあった。エステルの内面からは、他の誰とも比べようのない、愛らしい輝きがにじみ出ていたからだ。

アハシュエロス王はエステルを見、他のすべての娘達に勝ってエステルを気に入り、その頭に王妃の冠を載せて、彼女を王妃とした。

おう
王のとなりに立ったエステルは、幼いころから今までの記憶を思い起こしていた。

かみさま　わたし　おさな
（神様は、私が幼いころからずっと、私を見守って下さっていたんだわ。両親を亡くして一人ぼっちになり、人生が真っ暗闇になったように感じていたけれど、神様は私のためにご計画があったのね。もしその時神様が私を助けて下さっていたのなら、神様を最も必要としている今でも、助けて下さるに違いないわ。）

—第2部—

「もし死ななければ
ならないのなら、
死ぬ覚悟はできております。」

エステルを王妃とするにあたって、
盛大な戴冠式が催された。王妃のい
ない王国は、もはや過去のものとな
るのだ。喜びでいっぱいのアハシュ
エロス王は、エステルに敬意を表す
ために、大臣や家臣達をことごと
く集めて、大宴会を開いた。王の寛
大さを人々に示すために、すべての
州に免税が布告され、各州に祝いの
贈り物が届けられた。

エステルが王妃となって間もない
ころ、王の間の扉を守る家臣達のう
ち、ビグタンとテレシの2人が王に
対して怒りをいだき、暗殺を謀った。

王の門に坐していたエステルの
従兄弟モルデカイは、彼らが反逆的
行為をささやき合っているのを耳に
し、即座にエステルに知らせた。エ

ステルは、それをモルデカイからの
情報として王に報告した。そこで正
式な調査が行われ、彼らの目論見が
明るみに出たので、暗殺計画を企ん
でいた2人は逮捕され、絞首刑とな
った。ところが、この騒ぎにまぎれ
て、モルデカイのことは忘れ去られ
てしまった。王の命を救った功績を
受けなかったのである。

そのころアハシュエロス王は、高
慢で自己顕示欲の強いアガグ人ハマ
ンを首相として任命した。ハマンの
地位は他のどの大臣の地位よりも高
かったのだ。アハシュエロス王は、
彼が王の門をくぐる時、その場にい
る者達は皆、ハマんに敬礼するよう
にと命じた。神を信じるユダヤ人で
あるモルデカイは、たとえ法で求め
られたとしても、人に対してひざま
ずく気にはなれなかった。まして、
ハマンは高い地位にありながら、高
慢で残酷な人間だったので、なおさ
らだった。それでモルデカイは、ハ
マンが門を通り過ぎる時には、立つ
たまま反対側を向いていた。それが

続いたので、家臣の何人かがモルデ
カイの元に来て言った。

「あなたはどうして、王の命令に
背くのですか？ みんな、ハマンに
ひざまずいているではないですか。
あなたも、例外ではないのですよ！」

そこでモルデカイは答えた。「私は
ユダヤ人です。私がひざまずくのは、
神だけです。」

家臣達は、毎日モルデカイを説得
しようとしたが、それでもモルデカ
イが聞き入れないので、彼らはその
ことをハマんに報告した。モルデカ
イがあからさまに命令に背いたこと
を知り、その上、モルデカイがユダ
ヤ人であることから、ハマンは、今
こそモルデカイに仕返しをし、地上
からユダヤ人を絶滅させるいい機会
だと画策し始めた。

策略を確実に成功させるために、
ハマンは異教の神々の祭司らにくじ
を投げさせ、ペルシャ王国からユダ

ヤ人を一掃するにはいつが最善かを
占わせた。すると祭司らは、12月13
日（今日の暦では3月13日）が最良
の日であると告げた。それは、アダ
ルの月である。

次にハマンは、この計画をアハシ
ュエロス王に説明した。

「陛下の国の各州にいる民のうち
に、散らされている一つの民族がい
ます。」ハマンは狡猾にも、具体的
にユダヤ人とは言わないようにし
ながら、王に告げた。「その法律は
他のすべての民のものとは異なって
いて、彼らは王の法律を守りません
！ それゆえ、彼らを生かしておいて
は、王のためになりません。もしよ
ろしければ、彼らを滅ぼせとの詔を
出していただけませんか。」

そしてハマンは、そのために必要
な費用を自分で負担すると申し出た。
王の仕事を担当する者達に、銀1万
タラントを払うと言ったのだ。

首相に絶大なる信頼を寄せていた
王は、手から指輪を外してハマンに
渡した。「銀は、あなたに与える。
その民もあなたに与えるから、よい
と思うようにしなさい。」

思いのほか策略がうまくいったの
で、ハマンは大喜びだった。早速王
の書記官らと呼ぶと、アハシュエロ
ス王の名で詔を用意させた。それを
王の印章指輪で封印すると、127州
の知事に送った。その詔とは、3月
13日に、1日の内に、老若男女を問
わず、すべてのユダヤ人をことごとく
滅ぼし、殺し、絶やし、かつその財産
を奪い取れというものだった。

詔が送り出されると、ハマンと王は
共に座って、帝国の敵の厄介払いが
できると、祝杯を上げていた。

モルデカイは王の詔について耳に

すると、衣を裂き、荒布をまとして灰を
かぶり、町の真ん中へ出て行って大声
をあげ、激しく泣いた。詔が読まれた
メド・ペルシャの州ではどこも、同じ
ように嘆く人々の姿があった。ユダヤ
人達は断食し、嘆き悲しみ、大勢の者
が荒布をまとして灰の中に座した。
首都スサでも、このような突然の理解
しがたい驚くべき詔に混乱していた。

エステルの侍女達と侍従達がモル
デカイの動揺ぶりを伝え、エス
テルは非常に悲しんだ。どうしてそ
んなことになったのか分からないま
ま、エステルは、荒布を脱ぐように
と服を贈ったが、モルデカイは受け
取らなかった。

「一体どうしたのでしょうか。行っ
て、何が起こったのかを調べて来な
さい。」 エステルは侍従の一人で
あるハタクに言った。

モルデカイはハタクに、事の一部
始終を伝えた。また、ユダヤ人を絶
滅させるために、ハマンが王の金庫
に納めると約束した金額についても
伝えた。モルデカイは、正式な詔の
写しをエステルに見せるためにハタ
クに渡した。

これらの事実と共に、モルデカイ
はエステルに、民を救って下さるよ
うに王に嘆願するようにと伝えた。
ところがエステルは、それができな
いのだと返事した。

「この国では誰でも、たとえ王妃
でも、呼ばれないのに王の内庭に入
ることは禁じられています。それに
背く者は死刑になると法で定められ
ています。唯一の例外は、王が金の
笏を差し伸べて下さる時だけです。
けれども私はこの30日間、王のもと
へ召されてさえいません。」

するとモルデカイは、エステルに
こう返事した。「宮廷に住んでい
るからといって、あなただけが助かる
と思っははいけない。もしこのまま
だまっているなら、神は別の誰かを
用いてユダヤ人を救って下さるだろ
う。だが、あなたとあなたの一族は
滅びるだろう。神はあなたを、この
ような時のために王妃にして下さっ
たのではないだろうか？」

その時、エステルは悟った。どう
して、ただの孤児だった自分が王妃
になったのか？ 今までに起こって
きた事のすべてが、神のご計画の一部
だったのだ。神はこの危機が起こる
ことを前もってご存じで、ご自分の
民を救うために、自分を王妃として
下さったのだ。確かに、神はこのよ
うな時のために、自分を王妃として
下さったのだ。

そこでエステルは、侍従のハタクをモルデカイに送って、緊急の返事を伝えさせた。「スサにいるユダヤ人を全員集め、私のために断食をして下さい。3日の間、昼も夜も飲み食いしてはいけません。私と侍女達も、同様に断食します。その後、法に背きますが、王の元へ行きます。もし私が死ななければならないのなら、死ぬ覚悟はできております！」

モルデカイはすぐさま、エステルが命じたことをすべて実行した。

—第3部—

王妃エステルの勇氣ある行動

王妃エステルがアハシュエロス王の元へ行く日になった。ユダヤ人の抹殺命令に関する考えを改めてもらうためには、何と言えがいいだろうか？ ペルシャ王が発令した詔を変

更することがないことは分かっている。そのような前例もない。と、その時、ある考えが浮かんできた。

エステルは、侍女達に宴会の準備するように指図した。そして王妃の衣装をまとうと、王の広間に向かった。

アハシュエロス王の大広間に近付くと、エステルは自信が湧いてくるのを感じた。落ち着いた様子で、王の見える場所に入って待った。エステルの姿に気が付くと、アハシュエロス王は喜んで金の笏を差し伸べ、エステルを招いた。

エステルが金の笏に触れると、王はたずねた。「王妃エステルよ、望みは何か？ たとえ国の半分でも、与えるぞ。」

エステルは言った。「もし陛下さ

えよろしければ、今日陛下のために用意しました宴に、ハマンと共においで下さい。」

すると、王はすぐに使者を送り、王妃がお呼びだと言って、急いでハマンに来させた。

その夜、王とその首相はエステルの用意した宴会に臨んだ。酒が出される時になると、王は再びエステルに、望みは何かとたずね、国の半分でも与えると言って約束した。

そこでエステルは答えて言った。「お願いでございます。もし陛下が私をお心にかけて下さいますなら、どうか明日も、私が催す宴会に、ハマンと共においで下さい。その時に、陛下の質問にお答えいたします。」

王は非常に好奇心が刺激され、承諾した。疑いもなく、エステルはと

ても重要なことを考えていた。しかし、夜も遅いし、王はつかれていたので、明日まで待つのはいいことだ。

ハマンは天にも昇る思いだった。ところが、門を通る時にモルデカイを見かけると、自分に頭を下げず敬礼しようとしないので、怒りがこみ上げてきた。それでも自分を抑え、急ぎ帰って、妻のゼレシと友人達に、王から授かった数々の富と恩恵、それに昇進されたことについて話した。

「それだけではない。王妃エステルも、王と私だけを宴会に招いて下さったのだ。そして明日もまた、王と私だけが王妃の宴会に招かれておるのだぞ。」ハマンは有頂天に語った。

「それにしても、王の門に坐するあのユダヤ人のモルデカイがいる限りは、気分が台無しだ。」ハマンは苦々しそうに言った。

それを聞くと、ゼレシと友人達は、
25メートルもの高さの絞首台を立て、
明日になったらモルデカイを絞首刑にするよう、王に頼めばよいと言った。

「そうすれば、すっきりした気分
王と共に宴会に臨めるでしょう！」
彼らは一斉にそう言った。

ハマンは、それはいい考えだと思
い、絞首台を作らせた。

その同じ夜、アハシュエロス王は
どうしても眠れずにいた。それで、
国の記録文書を持ってきて読ませて
いた。するとその記録の中に、かつ
てビグタンとテレシがアハシュエロ
ス王を暗殺しようとしていたところ、
モルデカイがそれを発見してすぐに
報告したために、企みが未然に防げ
たという記録があった。

「この手柄のために、モルデカイ

にはどんなほうびを取らせたか？」
と、王がたずねた。

「何も取らせておりません。」と、
家臣達が答えた。

王は突然、「庭にいるのは誰か？」
とたずねた。

「ハマンです。」と家臣達は答えた。

ハマンはちょうどその時、自分が
立てた絞首台にモルデカイをかけて
ほしいと王に願うために、宮廷の外
庭にやって来たところだった。

「入らせよ。」と、王が言った。

ハマンが入って来ると、王はたず
ねた。「王が栄誉を与えたい者には、
どうしたらいいだろうか？」

ハマンは、自分以外に王が栄誉を
与えたい者などいるはずがないと思

いながら、自信満々に言った。「陛
下が栄誉を与えたい者には、こうし
たらいいでしょう。陛下ご着用の王
衣と、陛下の乗られている馬と、王冠
をお取りそろえ下さい。それらを、
最も身分の高い貴族の一人に渡して、
陛下が栄誉を授けたい者にそれらを
あてがわせて着飾らせ、馬に乗せて、
『王が栄誉を与えたい者には、こう
するのだ！』と呼ばわらせて大路を
歩かせてはどうでしょう？」

「では、急いでそうするのだ、ハ
マン。王の門に坐しているユダヤ人
モルデカイに王衣を着せ、わが馬を
引いて来て、そうするのだ。今言っ
たことの1つとして、おこたっては
いけない。」と王は言った。

ハマンは衝撃を受けたが、従わざ
るを得ない。アハシュエロス王が用
いる時と同じように、王衣と冠と馬を
用意させた。そして、ハマン自らが、
王の祝福を呼ばわりながら、モルデ

カイを馬に乗せて町を練り歩かなけ
ればならなかったのである。

それが済むと、モルデカイは王の
門に戻った。しかし、ハマンは頭を
覆って家に逃げ帰った。そして、一
体何が起こったのか、事の一部分始終を
ゼレシと友人達に話した。

「モルデカイはユダヤ人だ！ こ
れはあなたにとって良くない前兆で
す。」 帰って来たハマンに、相談役
らと妻は言った。

彼らがあれこれ話していると、王
の侍従達が来て、王妃エステル用の
意した宴会へ出向くよう、ハマンを
急ぎ立てた。

王とハマンが宴会に臨み、酒がふ
るまわれるころ、王はまたたずねた。
「王妃エステルよ、望みは何か？
必ず聞き届けられる。国の半分でも、
与えるぞ。」

エステルは答えて言った。「もし陛下が私をお心に掛けて下さいますなら、どうか、私と私の民の命をお救い下さい。私と私の民は、今にも滅ぼされようとしております。もし私達が奴隷として売られるだけなら、私はだまってもいられたでしょうが、その場合でも、王は測り知れない損失を被られたでしょう。敵は、そのような損失を穴埋めすることさえできないでしょう。」

「その敵とは、一体誰か？ そんな事を企んでいる輩は、どこにいるのか？」

「ここにいるハマンこそ、悪の張本人、私共の敵でございます。」エステルはそう言って、恐れおのっているハマンを指差した。

王は怒りに燃え、酒宴の席から立ち上がって、荒々しく宮廷の庭に出て行った。王が自分の運命を決めていることを悟ったハマンは、立ち上がって王妃エステルに命乞いを始めた。

アハシュエロス王が庭から戻ってくると、ハマンがエステルの座っている長椅子の上に身を投げ出してた。

「私の家で、しかも私の面前で、王妃をもはずかしめようとするのか？」そう王がさげふと、直ちに侍従達が来て、ハマンの顔にベール（死刑執行の前につけられるもの）をかけた。

その時、侍従の1人であるハルボナが、ハマンがモルデカイを処刑しようとして立てた絞首台についてたずねた。

「ハマン自身をそこにかけよ。」と、王は言った。

家臣達がハマンを絞首台にかけると、ようやく王の憤りが収まった。

ハマンの死と共に、指輪を取り返した王は、それをモルデカイに与え、モルデカイを首相とした。さらに、

王はハマンのすべての財産を王妃エステルに与え、エステルはモルデカイをその管理人とした。さて、ハマンが死んだとは言え、ユダヤ人への脅威がなくなったわけではなかった。王の詔は変更できなかったからである。エルサレムに戻ったユダヤ人も含めて、ユダヤ民族全体が滅ぼされようとしていた。

それで、エステルは再び王の元へ行った。王の足元でひれ伏すと、アガゲ人ハマンのユダヤ人撲滅計画を中止して下さるよう、涙ながらに訴えた。王妃と首相が二人ともユダヤ人とあって、アハシュエロス王は窮地に立たされた。すぐに手を打たねばならないことは分かっていたが、どうしたらいいかが分からない。それでエステルに、元の詔をくつがえさずに、自分達で詔を書き、それを

王の印章指輪で封印して各州に送るがよいと言った。

モルデカイとエステルはこの問題について話し合い、解決策を考案した。ユダヤ人達には、集結し、自分達を攻撃してくる外国勢力や州と戦って滅ぼす権利を与えるという文書を、モルデカイが作成することになった。

文書ができあがると、モルデカイは各写しを王の印章指輪で封印し、インドからエチオピアに至るまで、すべての州に向けて急送した。詔が届いた各地では、ユダヤ人が歓喜し、祝宴が開かれた。

ついに3月13日が来ると、ユダヤ人は自分達を守るだけでなく、ペルシャ帝国中にいる7万人もの敵を勇敢に打ち破った。

このすごい聖書の登場人物について、もっと読んでみよう。
「聖書の偉人：エステル」を見てね。